

(二〇一五年度)

2 国 語 問 題 (六〇分)

(この問題冊子は23ページ、三問である。)

受験についての注意

- 一、監督の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
- 二、試験開始前に、監督から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号と一致することを確認し、所定の欄に氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
- 三、監督から試験開始の指示があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっていることを確かめること。
- 四、筆記具は、HかFかHBの黒鉛筆またはシャープペンシルに限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能などを使用してはならない。
- 五、解答は、解答用紙の各問の選択肢の中から正解と思うものを選んで、そのマーク欄をぬりつぶすこと。その他の部分には何も書いてはならない。
- 六、マークをするとき、マーク欄からはみ出したり、白い部分を残したり、文字や番号、○や×をつけたりしてはならない。
- 七、訂正する場合は、消しゴムでいねいに消すこと。消しきずはきれいに取り除くこと。
- 八、解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。
- 九、試験時間中に退場してはならない。
- 十、解答用紙を持ち帰ってはならない。
- 十一、問題冊子は必ず持ち帰ること。

次のA、Bの文章を読んで、後の問に答えよ。

A

近代自然科学は、一六世紀中葉の「コペルニクス革命」に始まり、一七世紀に入ってからガリレイの実験、デカルトの哲学的基礎、ニュートンの古典物理学の完成に至るまで、およそ一〇〇年をかけて作り上げられたものである。この時期の自然科学の目標は、自然という書物に書かれた神の御心を読み解き、完全なる神の存在証明をすることであった。神の代理人をせんしやう僭称して現世を支配するローマ法王の目を欺き、安心して自然科学に打ち込むためには、そのような御旗を立てねばならなかったのだ。

といっても、彼らが目指したのは、紀元前四世紀に確立したアリストテレス自然学の打破であって、けっしてキリスト教神学への挑戦ではなかった。この二つ(アリストテレス自然学とキリスト教神学)は、本来別物であり、一三世紀に入るまで、むしろ敵対関係にあったとさえ言える。たとえば、四世紀の終わりごろ、聖アウグスティヌス(三五四～四三〇)は、「球状の天が宇宙の中心にある地球を取り囲んでいようと、地球のどこかにひっかかっているように、私にとって何の関わりがあるのか」と語っており、キリスト教神学はアリストテレスの宇宙体系とは何の関係もないと考えていたのだ。さらに、一二一〇年にパリで開催された大司教会議において、アリストテレスの言明が聖書と矛盾するという理由で、アリストテレス自然学を教えることを禁ずる決定をしている。聖書は有限の過去に宇宙が神の手によって創世されたと教えているが、アリストテレス宇宙は永遠に変化しないからだ。

ところが、一三世紀中葉、トマス・アクイナス(一二二五～七四)は、『神学大全』において、アリストテレスの宇宙体系(地球を宇宙の中心に据えた天動説)と神学的教義を調和させることに努力を傾けた。聖書に書かれている神についての説明の根拠をアリストテレスの権威に求めたのだ。アリストテレスの宇宙体系の根幹では、月より下の世界にある地球は、火・空気・水・土の四元素で造られ、宇宙の中心にあつて動かない特別な存在と考えられていた。そして、月より上の世界では、高貴な

元素であるエーテルが固まった七つの星(太陽、月、火星、水星、木星、金星、土星)と宇宙の果てにある恒星が、それぞれの天球面上を円運動している、とされていたのである。

この天動説によって、至高の神が宇宙の中心に位置する地球に在ることが保証され、その神に直接仕える教会こそが現世の支配者であることも自然に導かれる。このように、アキナスは、神学的推論とアリストテレスの自然学を大胆に結びつけ、聖書が人間と宇宙、そして宇宙と神との関係を明確に記述していることを証明しようとしたのだ。いわば、当時の科学的信念²によって聖書の権威を高め、キリスト教世界を引き締めようという試みであった。こうして、アリストテレス体系は聖書と渾然^{ぜんぜん}一体になってしまった。キリスト教とは縁もゆかりもないアリストテレスにとつては、さぞや大迷惑であっただろうに。

その目的のため、アキナスは、あえて聖書の字義通りの解釈に疑いを投げかけることすらした。たとえば、新約聖書「エペソ書」には、キリストは「諸々の天を超えて高く昇られ、すべてのものを満たした」と書かれているが、アリストテレス宇宙では恒星天球の上にはもはや空間はなく、キリストは昇天できないはず、となってしまう。そこでアキナスは、「完全無欠なキリストは動かずしてすべてのことを可能にするのだから昇天する必要がない」と断じ、「聖書の一節は無知な人々にもわかるように故意に誤った記述をしているのだ」と言い切つて、アリストテレス宇宙との矛盾を回避しようとした。

その意味では、アキナスは、自然哲学(科学)が独自の真理を追究することに対し、ある種の認可を与えたと言えなくもない。聖書を字義通り受け取らなくてもよいという範を示したのだから。

レトリックとメタファーを駆使して、アリストテレスの地球中心の宇宙観と聖書とアキナスの神学をうまく調和させることに成功したのがダンテ(一二六五―一三二一)であった。ダンテは、一四世紀初頭『神曲』において、地球の中心にある地獄、パーガトリー山上に広がる地上の楽園、地球を取り囲む九つの天球をまわす天使、そして第一〇番目の天に神の国を配置し、いかにも荘厳で美しい宇宙構造を目に見えるようにしたからだ。その後、アリストテレスの天動説は崩されたが、ダンテの宇宙体系は現在に至るも、なお人々の頭に染み込んでいる。宗教や科学とは異なり、文学的表象概念はいつまでも残り続けるのだろうか。

天動説は天の詳しい観察から崩されることになった。それも、フラウエンブルク寺院の大管区長という、神に最も近いはずのコペルニクス(一四七三〜一五四三)によつて。

コペルニクスは、神が宇宙を創つたのなら、こんなに複雑な宇宙であるはずがないと疑つたのだ。実際、天動説によつて七つの星の運動を説明するためには、全体で八〇を超える円運動を組み合わせねばならなかつた。コペルニクスよりずっと以前、一三世紀のレオン・カステイリア王であつたアルフォンソ・エル・サビオ(アルフォンソ一〇世)は、天文学に興味を持ち、当時の天文表を改訂して「アルフォンソ表」を作つた人なのだが、天動説に基づいて惑星の軌道を求めようとすると膨大な計算が必要であることから、「もし神が私に相談してくれたなら、もつと宇宙を簡単に創るように助言したのに」と語つたと伝えられている。天動説宇宙は、惑星運動の観測が進むにつれ、ますます複雑な体系になつていつたのだ。

科学者気質の特徴の一つは疑い深いことにあるが、それは必ずしも猜疑心さいぎしんのことではない。自らの単純性と現実の複雑性がぶつかつたとき、その矛盾が喉に引つかかつて現実が飲み込めないだけなのである。既存の理論体系を疑うことなくどつぷり浸ひたかつてしまうと、複雑怪奇になつてしまつた理論の醜みにくさに気がつかないが、ふと我に返つて客観的に見たとき、その醜悪さに疑いを持つてしまうのだ。「神はもつと単純で美しい宇宙を創つたはずだ」と。スコラ哲学における思想節約の原理「オツカムの剃刀かみそり」のように、最小の仮定で最大の結果が得られる理論こそ美しい、とする科学者の審美観もあるだろう。それを「神」と呼ぶかどうかは別として。

天動説から地動説に移ることは、とりもなおさず、地球が宇宙の中心にあつて不動であるという特権的な地位を振り捨てることに他ならない。地球も、太陽の周りをまわる一つの惑星に過ぎなくなるからだ。ならば、唯一神が地球に在るといふ根柢もなくなつてしまふ。

では、神はどこにいるのか？ 地動説を採るためには、新たな神の居場所を考え出さねばならない。コペルニクスの時代、人々の宇宙は太陽系に閉じていた。したがつて、神を宇宙の中心に据えようとするれば、太陽に神の座を用意しなければならぬが、燃え盛る灼熱しゃくねつの太陽ではさすがの神も居心地が悪かろう。とりあえず、コペルニクスは、神の居場所と宇宙体系を切

り離すことにした。地動説は天上の幾何学であつて、地上における神の存在証明とは無関係であるという態度を貫き通したのだ。

B

神の新たな居場所を見出したのはガリレイ（一五六四—一六四二）であつた。一六〇九年、ガリレイは発明されたばかりの望遠鏡を手にして天の川に目を向けた。そして、ミルクを流したように見える天の川は、実は無数の「太陽」の集まりであることを見出したのだ。このとき、人々の宇宙は、太陽系から無数の星が散らばる星界へと一挙に拡大することになった。ならば、太陽系の中心にいたがるようなケチな神ではなく、より広い星の世界全体を統括する神こそが、完全なる存在としてふさわしい。神は、この地球から離れて、無限の彼方にまで広がる宇宙を巡巡しているとすればよいではないか（むろん、神を独占したかつたら、あなたの心に秘かに匿つてもいい）。

こうして、地動説と無数の「太陽」の発見によつて神は地上から追放されたのだつた。折しも、地上の権力が教会から世俗領主に移つたのと時を一にしている。以来、領主たちは、ヌケヌケと王権は「神授」されたと宣言するようになった。肝心の神が、広大な宇宙のどこをさすらつてゐるのかわからないのに。

ガリレイが地動説を公然と支持するようになったころ、それまで寛容であつたローマ教会からも「地球が動く」という説は聖書の記述と矛盾する」という非難がわき起こつた。それが一六一六年の第一次ガリレイ裁判につながるのだが、ガリレイは、その前年の一六一五年にクリスティーナ大公妃宛の手紙で、彼の聖書観を述べている。そこでは、「『聖書』には大変難解な箇所があり、文字通りの意味とはまったく異なつたことが述べられていたりします。もし、『聖書』の記述を字義通りに受け取つてしまうと、誤りを犯すことがあるかもしれません。というのも、聖霊が述べた『聖書』の言葉は、無学で教養のない庶民にも理解できるようにと、聖なる筆記者が書き留めたもの」なのだから、と書いている。まさに、トマス・アクイナスと同じ論法を用いたのである。

彼の立場は、神は「最初に自然を通して、次には特にその教えによって理解される。つまり、神の作品である自然と、神の言葉である教えによって」理解される存在であった。「自然についていえば、これは容赦なく不変なものであり」、「この点は、文字通りの意味とはいくらか異なる解釈がありうる『聖書』とは違っている」として、自然研究こそ神の証明にとって重要であると説いたのだ。ガリレイは教会に屈服して地動説を捨てたが、結果的には、このような考えかたが神を地上から追放する端緒となったのである。

(池内了『物理学と神』より)

〔注〕○オッカムの剃刀かみそり：議論において、不要な言葉や概念は極力剃り落として必要最小限のものとするべきだとする方針で、中世イギリスの哲学者オッカムが用いた論法として知られている。

問一 傍線部1「自然という書物に書かれた神の御心を読み解き」の前提として、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 聖書の神の言葉は既に十分に研究され解読されているから、まだ理解が及ばない自然を研究対象とすべきである。
- b 自然も神による創造物であるから、その研究は、神の意図の理解のために有用である。
- c 自然は神から自由な存在であるから、そこにも神の意図が反映しているならば、それは聖書とは異なる資料である。
- d 言葉には神が介入しているから、神の意図を理解するには、言葉から独立した存在である自然も資料とすべきである。

問二 傍線部2「アリストテレス体系は聖書と渾然一体になってしまった」の意味として、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a アリストテレスの著作を聖書の記述に基づいて解釈し直した結果、自然学が神学に変容した。
- b アリストテレスの宇宙観は、聖書に見えるキリスト教の宇宙観に基づいており、本質的には同じものである。
- c アリストテレスの自然学は、教会による禁止を避けるために、聖書との整合性を図って大きく改変された。
- d アリストテレスの自然学の成果を神学の主張の根拠の一つとして用いたため、自然学も聖書解釈の一部になった。

問三 傍線部3「神が宇宙を創ったのなら、こんなに複雑な宇宙であるはずがないと疑った」は、何を疑ったのか、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 神が創ったのであれば宇宙の体系は美しいはずで、体系が複雑であることから、その体系自体の正当性を疑った。
- b 神が創ったのであれば宇宙の体系は美しいはずで、神が創ったということ自体を疑った。
- c 神が創ったのであれば宇宙の体系には人智が及ばないはずで、人間が体系を推定すること自体を疑った。
- d 神が創ったのであれば宇宙の体系の解釈は神学の領域であり、宇宙を自然科学で解釈する従来の方法論自体を疑った。

問四 傍線部4「惑星運動の観測が進むにつれ、ますます複雑な体系になっていった」のは何故か、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 精確な観測が増えるほど、神の設計の精緻さが明らかになり、その精緻な体系が克明に記述できるようになるから。
- b 精確な観測が増えるほど、説明できないデータが増え、それを説明するために更に体系が複雑になるから。
- c 観測が進むと観測データが増え、そのたびに体系に新たなデータが加わって従来の説明を補強していくから。
- d 天動説では恒星天球の上には空間がないため、得られたデータの位置づけに無理が生ずるから。

問五 傍線部5「科学者気質の特徴の一つは疑い深いことにある」の「疑い」の説明として、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 自らが依拠している理論体系自体の信頼性を客観的に見直すための動機。
- b 自らが行なった観測などに基づかないデータには、その信頼性を確かめる手段を必ず用意するという姿勢。
- c 依拠する理論体系がしばしば置き換わることにより、特定の理論体系を信任するという姿勢が欠如していること。
- d 自らが行なった研究を見直して、それに客観的な判断を与えることができる冷静さ。

問六 傍線部6「それを「神」と呼ぶかどうかは別として」が暗黙の内に言っていることとして、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 科学者の審美観は、それに依拠する科学者もいれば、信じられないとする科学者もいる点で、宗教に似ている。
- b 科学者の審美観は、各個人それぞれに独特なものではなく多くの科学者が共有しており、いわば常識である。
- c 科学者の審美観は、何かの根拠に基づくものというよりは、証明できない前提であり、信仰に近い。
- d 科学者の審美観の根拠が薄弱であることは事実だが、それと神学における神とは、本質的に別のものである。

問七 傍線部7「人々の宇宙は太陽系に閉じていた」とはどういう意味か、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 人々が知っていた宇宙についての知識は、太陽系についてのものだけだった。
- b 人々は、太陽系以外の宇宙に目を向けなかった。
- c 人々は、太陽系の外に神はいないと思っていた。
- d 人々は太陽系の観察・理論化で満足して、それ以外を顧みなかった。

問八 傍線部8「地動説と無数の「太陽」の発見によって神は地上から追放された」の理由として、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 合理的な自然科学の進展により、学問は神学から自由となって、学問が神を必要としなくなった。
- b 宇宙には無数の太陽があることが判明したので、天球中の唯一神という概念が維持できなくなった。
- c 地動説では恒星天球の上に更に空間が存在することになり、聖書のとおり昇天が可能になった。
- d 地球は不動の中心ではないことが判明したので、もはや神の居場所を太陽系・地球に限定する理由がなくなった。

問九 天動説・地動説について、この文章の論旨にもつとも近いものを次の中から一つ選べ。

- a 天動説は神の存在を地球に置くために考案されたのであり、太陽系以外の宇宙の発見により神を地球に置かずに済むようになれば、もはや天動説の維持は不要であった。
- b 地動説は天体運動の説明を単純化するが、むしろその単純さこそが神の意志の存在のあかしと考えられた。
- c 地動説は全ての中心としての地球という概念を放棄させ、神の存在自体にも疑いを生じさせた。
- d 天動説は全ての中心としての地球の特権的な位置を確保するものであり、太陽系以外の宇宙の発見により、その特権は維持できなくなった。

問十 自然科学研究と「神の存在」の関連について、この文章の論旨に適合するものを次の中から二つ選べ。

- a 自然現象の科学的説明は、神学的な解釈と必ずしも矛盾するものではなく、むしろ神学の介入により地動説の発見が導かれるなど、両者は相補う部分がある。
- b 完全である神の存在を前提とした自然科学研究は、その結果として天動説が維持できなくなるなど、かえって神の存在への疑いを招いた。
- c 完全である神の存在を前提とした自然科学研究は、神学的に説明を与え得る範囲内で、聖書の記述自体を疑問視することさえ行ない得た。
- d 自然現象の科学的説明が単純かつ美しいことを目指すことは、自然科学研究においても神の存在を前提にすることに相通するものがある。
- e 自然現象の科学的説明が単純かつ美しいことを目指すことは、科学への神学の影響を排除するための原動力であり続けた。

二

次の文章は謡曲『二人静』の一節である。大和国(奈良県)吉野川の支流菜摘川で若菜を摘んで、吉野山の勝手神社に供えようとする里の女(ツレ)に死霊が憑依する。神社の神職(ワキ)に名を問われて、女は源義経の愛妾静御前と名乗るが、所望されて舞を舞ううち、いつしか死霊(シテ)自身も舞い始める場面である。これを読んで、後の問に答えよ。

(ワキ)さては静御前にてましますかや、静にてわたり候はば、隠れなき舞の上手にてありしかば、舞を舞うて御見せ候へ、跡をばねんごろに用ひ申し候ふべし。(ツレ)わが着し舞の装束をば、勝手の御前に納めしなり。(ワキ)さて舞の衣裳はなに色ぞ。(ツレ)袴は精好。(ワキ)水干は。(ツレ)世を秋の野の花尽くし。(ワキ)これは不思議のことなりとて、宝蔵を開き見れば、げにげに疑ふ所もなく舞の衣裳の候ふ、これを召されて疾く疾く御舞ひ候へ。

(ワキ)静御前の舞を御舞ひあるぞ、皆々寄りて御覧候へ。(ツレ)げに恥づかしやわれながら、昔忘れぬ心とて、(ワキ)さも懐かしく思ひ出の、(ツレ)時も来にけり。(ワキ)静の舞。(ツレ)今み吉野の川の名の、シテ登場(シテ)菜摘みの女と思ふなよ。(地謡)川淀近き山蔭の、香も懐かしき袂かな。

(二人)さては義経凶徒に準ぜられ、すでに討手向かふと聞こえしかば、小船に取り乗り、渡辺神崎より、押し渡らんとせしに、海路心に任せず難風吹きて、本の地に着きしこと、天命かと思へば、科なかりしも。(地謡)科ありけるかと、身を恨むるばかりなり。

(地謡)さるほどに、次第次第に道狭き、御身となりてこの山に、分け入り給ふ頃は春、所はみ吉野の、花に宿借る下臥しも、のどかならざる夜嵐に、寝もせぬ夢と花も散り、まことに一栄一落、目のあたりなる憂き世とて、またこの山を落ちて行く。

(二人)昔浄御原の天皇、(地謡)大友の皇子に襲はれて、かの山に踏み迷ひ、雪の木蔭を、頼み給ひける、桜木の宮、神の宮滝、西河の滝、われこそ落ち行け、落ちては波は帰るなり。さるにてもみ吉野の、頼む木蔭の花の雪、雨も溜まらぬ奥山の、

音騒がしき春の夜の、月は朧にて、なほあしびぎの山深み、分け迷ひ行く有様は。(二人)唐土の、祚国は花に身を捨てて、(地謡)遊子残月に行きしも、今身の上に白雪の、花を踏んでは、同じく惜しむ少年の、春の夜も静かならで、騒がしきみ吉野

の、山風に散る花までも、追ひ手の声やらんと、跡をのみみ吉野の、奥深く急ぐ山路かな。

(地謡)そのみならず憂かりしは、頼朝に召し出だされ、静は舞の上手なり、疾く疾くとありしかば、心も解けぬ舞の袖、返すがへすも恨めしく、昔恋しき時の和歌。

(二人)しづやしづ 【二人舞】

(二人)しづやしづ、しづの苧環をたまき繰り返し、(地謡)昔を今に、なすよしもがな。

(二人)思ひ返せば、いにしへも、(地謡)思ひ返せば、いにしへも、恋しくもなし、憂きことの、今も恨みの、衣川、身こそは沈め、名をば沈めぬ。(二人)もののふの、(地謡)物ごとに憂き世の慣らひなればと、思ふばかりぞ山桜、雪に吹きなす花の松風、静が跡を弔ひ給へ、静が跡を弔ひ給へ。

〔注〕 精好 絹織物の一種。たて糸・よこ糸共に練糸で、またはよこ糸を生糸で織り出し、厚手で美しい。

水干 狩衣を簡素化したもの。白拍子しろびょうし(今様をうたいながら舞を舞った、雑芸を業とする遊女)の男装にも用いる。

渡辺 摂津国(大阪府)の歌枕。淀川河口に開けた港。

神崎 摂津国(兵庫県)の地名。神崎川河口に開けた港。遊女が多くいたことでも有名。

浄御原の天皇 天武天皇。

大友の皇子 天武天皇の兄天智天皇の第一皇子。壬申の乱に天武天皇と争い敗れた。

桜木の宮、神の宮滝、西河の滝 すべて吉野山中の地名。この内、宮滝に吉野離宮が造営された。

祚国 佐国とも。中世の『古今和歌集』注釈書などに由来する人物。

頼朝 源頼朝。

衣川 陸奥国(岩手県)の歌枕。平泉にあった衣川館を指す。ここで義経は自刃した。

問一 傍線部1「跡をばねんごろに巾ひ申し候ふべし」とあるが、誰が何をするといいのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 勝手神社の神職が、静御前の生前の事蹟を年代順に調べて顕彰する。
- b 勝手神社の神職が、静御前の後継者を丁寧に探し出して見舞う。
- c 勝手神社の神職が、静御前の往生していない霊を丁寧に慰める。
- d 勝手神社の神職が、静御前の霊が本物かどうか確認して供養する。

問二 傍線部2「世を秋の野の花尽くし」・6「道狭き、御身となりてこの山に、分け入り給ふ」・9「花に身を捨てて」とあるが、どういう意味か。次の中からもっとも適切なものをそれぞれ一つ選べ。

- 2 a 憂き世に飽きた世捨て人が花を愛でている文様。
 - b 浮き世離れたような豪華な野の花ばかりの文様。
 - c 恋に飽きない心を示す花やかな色の文様。
 - d 秋の野の花を数多く並べて飾り立てた文様。
- 6
- a 身を隠す所もなくなつて、この山の細い道に入り込む身になられた。
 - b 追及が厳しくなつたので、安全なこの山に入り込むことになさつた。
 - c 行くあてもなくさまよううちに、この山の細い道に入り込まれた。
 - d 行くべき所を探し求めて、安全なこの山に入り込むことになさつた。

9 a 花を存分に見るために出家遁世して

b 花以外のことには一切関心を持たないで

c 花を見るためには命の危険も顧みずに

d 花ざかりの中で死んでゆく我が身を夢想して

問三 傍線部3「今み吉野の川の名の、菜摘みの女と思ふなよ」とあるが、どういう意味か。次の中からもっとも適切なものを

一つ選べ。

a 今あなたは吉野川を御覧になっているが、舞を舞う私は吉野川から来た菜摘女ではない。

b 今あなたは菜摘川を御覧になっているが、舞を舞う私は菜摘川から来た菜摘女ではない。

c 今あなたは菜摘女を御覧になっているが、舞を舞う私は菜摘女ではない。静御前である。

d 今あなたは静御前を御覧になっているが、舞を舞う私は静御前ではない。菜摘女である。

問四 傍線部4「川淀近き山蔭の、香も懐かしき袂かな」は、『万葉集』の和歌「吉野なる菜摘の川の川淀に鴨ぞ鳴くなる山蔭に

して」を踏まえている。その説明としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 「香も」は「鴨」と掛詞になっていて、この歌が詠まれた万葉の頃を偲んでいる。

b 「香も」は「鴨」と掛詞になっていて、川で見つけた鴨の鳴き声を思い出し出している。

c 「香も」は「鴨」と掛詞になっていて、白拍子姿で舞った数々の思い出に耽っている。

d 「香も」は「鴨」と掛詞になっていて、恋人であった義経を偲んでいる。

問五 傍線部5「天命かと思へば、科なかりしも。科ありけるかと、身を恨むるばかりなり」とあるが、どういう意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 逃走の失敗は天命かと思うと、罪など何も犯していないことが明白である。それなのに、罪を犯したのではないかと自分を責めてばかりいるようになった。

b 逃走の失敗は天命かと思うと、この世では罪など何も犯していないのに、前世で犯していたのかと我が身の因縁を恨むこととなった。

c 逃走の失敗は天命かと思うと、罪など何も犯していなくても、犯したのと同然であることがはっきりとわかって、我が身の不運を恨んでばかりいるようになった。

d 逃走の失敗は天命かと思うと、前世では罪など何も犯していないのに、この世で犯してしまったのだ、と後悔することしきりであった。

問六 傍線部7「のどかならざる夜風に、寝もせぬ夢と花も散り」とあるが、どういう意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 夜の嵐が静かでなかったため、眠ることのできない夢を見たが、その夢の中で、花ははかなく散っていった。

b 嵐の音が静かでなかったため、よく眠ることはできなかったが、夜見た夢の中で、心静かに花は散っていった。

c 心も嵐も静かでなかったため、夜眠ることもできず、見ることもできなかった夢のように、はかなく花も散った。

d 心も嵐も静かでなかったが、最後の一夜を語り明かして、ふたりの夢が、花のようにはかなく散るのを感じ合った。

問七 傍線部8「われこそ落ち行け、落ちても波は帰るなり」とあるが、どういう意味か。次の中からもっとも適切なものをつ選べ。

- a 自分は吉野山から落ちて行くが、自分が落ちて行っても滝の波は落ちていかない。
- b 自分は吉野から落ちてまた帰ってくるが、吉野の滝も同じように落ちてはまた帰るのである。
- c 自分は滝が落ちるようには落ちないが、滝の波は何度も落ちてはまた帰るのが羨ましい。
- d 自分は滝が落ちるように落ちて行くばかりであるが、滝の波は落ちてはまた帰るのが羨ましい。

問八 傍線部10「遊子残月に行きしも、今身の上に白雪の、花を踏んでは、同じく惜しむ少年の、春の夜も静かならで」には『和漢朗詠集』の漢詩「遊子猶行於残月」と「踏花同惜少年春」とが踏まえられている。引用によってどのような心情が表現されているか。次の中からもっとも適切なものをつ選べ。

- a 早朝から旅を続ける旅人の意欲に共鳴し、少年の日々を回想して喪失感に苦しむ。
- b 早朝から旅を続ける旅人の苦難に共感したり、少年の日々を懐かしんだりする。
- c 有明月を見ながら女の家から帰る遊興の日々を思い出し、若かったころを懐かしむ。
- d 有明月を見ながら女の家から帰る遊興の身に共鳴し、少年の日々を後悔する。

問九 傍線部11「疾く疾くとありしかば、心も解けぬ舞の袖、返すがへすも恨めしく」とあるが、その説明として正しくないものを次の中から一つ選べ。

- a 「疾く疾く」と「解けぬ」とは掛詞。早く舞えとせかされればされるほど、逆にすぐには心は打ち解けなかった。
- b 「解けぬ」と「返す」とはともに「袖」の縁語になる。不本意な舞を披露したことが何よりの心残りであった。
- c 「(舞の袖)返す」と「返すがへす」とは掛詞。袖を返して舞うには舞ったが、何度考えても口惜しいことだった。
- d 「恨めしく」に「袖」の縁語「裏」が掛かる。本当に口惜しいのは、袖の裏にある心の内を見せてしまったことだった。

問十 傍線部12「いにしへも、恋しくもなし、憂きことの、今も恨みの、衣川、身こそは沈め、名をば沈めぬ」とあるが、その説明として正しくないものを次の中から一つ選べ。

- a 衣川で最期を遂げた義経に対する愛情は、昔も今も少しも変わるところがない。
- b 昔に返りたいと思っていたが、義経の死後はその考えが変わった。
- c 義経の名声は生前も死後も一向に変わるところがない。
- d 衣川で壮絶な最期を遂げて以来、義経の武名は世に知られる所となった。

問十一 傍線部13「物ごと」に憂き世の慣らひなればと、思ふばかりぞ山桜」とあるが、静御前のどのような心情が表現されているか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 義経と別れた後も、恋しい気持ちが募るばかりで、静かに人生を振り返ることができない心情。
- b 義経に逢いたかった気持ちもおさまり、もう静かに眠りにつこうというあきらめの心情。
- c 義経も衣川で最期を遂げ、やがて自分にも死が訪れるのを、おそれたりおびえたりする心情。
- d 義経の名声も高まるにつれて、共に生きた日々を思い出しながら、回想に耽っている心情。

三

次の詩(甲)とそれに対する注釈(乙)とを読んで、後の問に答えよ。なお、設問の関係上、返り点・送り仮名を省いたところがある。

(甲)

江上^ニ值^ニ水^ノ如^{クナルニ}海^ノ勢^ノ聊^{いざさ}短^ス述^ス 杜甫

為³人性癖^{ニシテふけれ}耽^ニ佳句^ニ語^ニ不^{ンバ}驚^{カサ}人^ヲ死^{ストモ}不^レ休^メ

老^イ去^{リテ}詩篇^ニ渾^{ズベテ}漫興^ニ春⁴来花鳥莫深愁

新⁵添^ニ水檻^ニ供^レ垂釣^ニ故^ニ著^ニ浮槎^ニ替^レ入^レ舟

焉⁶得^下思^上如^ニ陶謝^ニ手^上令^ニ渠^ニ述^作与^同遊

(乙)

此^レ因^{リテ}觀^{ルニ}水勢^ノ如^{クナル}海^ノ未^ダ暇^{アラ}長^ク吟^{スルニ}聊^カ為^ス短^ク述^ス。故^ニ追^ニ感^{シテ}平生^ヲ而^{シテ}自^ラ謂^フ性癖^{ニシテ}工^ク詩^ヲ造^{レバ}語^ヲ必^ズ欲^ス驚^{カサント}人^ヲ不^{レバ}然^ラ雖^{ドモ}死^{スト}不^レ止^メ。然^{シテ}此^レ壯年^ノ之^{ナリ}事^ヲ今^ハ則^チ

老イタリ矣。所レ作ル皆漫興ニ成ス之ヲ。而シテ寄ス語ヲ花鳥ニ、無レ用ニ深愁フルコトヲ。遂言初作ニ水亭ヲ以テ為シ垂釣ルル之地ト、不シテ用レ渡江ルコトヲ、特以ニ槎木ヲ代フ舟ニ。聊可シ自娛シム。今水勢如ク海ノ、正可シ憑リテ檻長吟ス。而レドモ我老イテ不レ能ハ苦シムルコト思フ。安得有如陶謝諸公与我同遊而或作或述也邪。

〔注〕○水檻—水辺の建物のですり。

○陶謝—陶淵明と謝靈運。ともに六朝時代を代表する詩人。

○浮槎・槎木—いかだ。

〔『杜少陵先生詩分類集註』〕

問一 傍線部「値」の意味を別の漢字一字で表す場合、どのような漢字がふさわしいか。次の中からもっとも適切なものをつ選べ。

- a 遇
- b 植
- c 置
- d 価

問二 傍線部2「短述」とはどういうことか。次の中からもっとも適切なもの一つ選べ。

a 眼前の大江の水の勢いに圧倒され、年老いた自分の卑小さが身にしみたため、我が身を反省する詩を作ったということ。

b 眼前の大江の水の勢いに圧倒され、落ち着いて長い古詩などを作る余裕もなく、ひとまず短い律詩を詠んだということ。

c 眼前の大江の水の勢いに励まされるように、詩興がわき上がってきたので、あつという間に詩を詠み上げたということ。

d 眼前の大江の水の勢いに励まされるように、陶淵明のような反骨心がよみがえり、世をそしる詩を詠じたということ。

問三 傍線部3「為人」はどのような意味か。次の中からもっとも適切なもの一つ選べ。

a 性格として

b 他人のために

c 大人になって

d わざと

問四 傍線部4「春来花鳥莫深愁」はどのようなことを言った句か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 年を取って詩を作ること自体が面倒になってきた私にとって、花や鳥たちはもう関心の外側にあるものとなってしまった。

b もはや詩作に精魂を傾けることもなくなった今、花や鳥たちも詩の題材とされることを氣遣う必要はなくなったであろう。

c 人々があつと驚くような表現を追求することをやめてしまった以上、花や鳥たちに心を煩わされることはもうないだろう。

d 詩の出来にこだわらず自由な詩作ができるようになった私のように、花や鳥たちも春の愁いに沈むのはやめるがよい。

問五 傍線部5「新添水檻供垂釣 故著浮槎替入舟」の説明としてもっとも適切なものを、次の中から一つ選べ。

a 杜甫が水辺に作ったてすりは、近所の村人らと一緒にのんびり釣りを楽しむためのものである。

b 杜甫の釣りは、釣りをしている周の文王に見出された太公望に自らをなぞらえることである。

c 舟ではなくいかだを使うことには、対岸の都市の繁華を遠ざけようという気持ちが表れている。

d ひとりいかに乗って心の赴くままに川を上下することは、以前から続いている楽しみである。

問六 傍線部6「焉得思如陶謝手 令渠述作与同遊」の口語訳としてもっとも適切なものを、次の中から一つ選べ。

a 文運衰えた現在、陶淵明や謝靈運のような詩の名手が存在し、ともに詩を作ったり、ともに遊んだりできようか、いやできはしない。

b 陶淵明や謝靈運のような詩の名手と出会って、彼らの作品を私の友人たちに贈ってやってもらうことはできないだろうか、いやできはしない。

c どうにかして陶淵明や謝靈運のような詩の名手を友として、彼らに詩を作らせ、一緒に遊べたらよいのだが。

d どうにかして陶淵明や謝靈運のような詩の名手と同等の技能を身につけ、彼らとともに詩を作り、遊べたらよいのだが。

問七 傍線部7「安得有如陶謝諸公与我同遊而或作或述也邪」に返り点を施した次の選択肢の中から、もっとも適切なものを一

つ選べ。

a 安得_下有_レ如_二陶謝諸公_一与_レ我同遊而或作或述_上也邪

b 安得_レ有_下如_二陶謝諸公_上与_レ我同遊而或作或述也邪

c 安得_乙有_下如_二陶謝諸公_上与_レ我同遊而或作或述_甲也邪

d 安得_丙有_下如_二陶謝諸公_一与_レ我同遊而或作或述_甲也邪

問八 杜甫と同時代の詩人を、次の中から一人選べ。

a 白居易

b 蘇軾

c 韓愈

d 李白